

ポップ文化の香り漂う街

東京工科大学 石塚美佳

米国第2の大都市、カリフォルニア州ロサンゼルス (Los Angeles)。メキシコからの入植者が定住し、「天使の女王の町」(El Pueblo de la Reina de Los Angeles) と呼んだことが、地名の起源だと言われている。20数年ぶりに仕事で訪れると、真っ青な空とまばゆい太陽が歓迎してくれた。時を経ても、カリフォルニアのすがすがしい空は変わらない。

空港到着後、まずはロサンゼルスの西に位置するサンタモニカへ。ビーチ沿いの観光案内所脇に、ひっそりと立つ「ルート66」(Route 66)の標識を見つけた。ルート66は伊利ノイ州シカゴとロサンゼルスをつぶ旧国道で、アメリカの小説、音楽や映画・ドラマにも度々登場する。カリフォルニア州出身の作家ジョン・スタインベックは『怒りの葡萄』の中で、西部発展を支えた貧しい開拓民が西へ西へと目指す姿を描き、ルート66を「マザーロード」(The Mother Road)と呼んだ。音楽では、ナット・キング・コールが歌った「ルート66」をローリング・ストーンズはじめ多くのアーティストがカバーしている。近年では、2006年公開のディズニー映画『カーズ』の当初のタイト



ル候補が、『ルート66』であったことが知られている。サンタモニカはルート66の最終地点であるが、周囲にはサンタモニカ・プレイスなど大規模ショッピングセンターや観光客目当ての店が立ち並び、いまや控えめに標識が立っているのみである。

サンタモニカを離れ、一路ハリウッドへ。映画好きなら一度は訪れたい場所である。20数年前にも訪れたかったのだが、アメリカ人の友人から「治安が悪い」の一言で止められた。今回念願の訪問となり、研修に参加した学生たちよりも興奮していたと思う。ハリウッド・ブルバード沿いにあるドルビー・シアターは、2001年以来毎年アカデミー賞授賞式会場となっており、劇場に続く大階段の両脇には、過去の受賞作品が名を連ねている。それらを眺めているだけでも、プレゼンターが“The Oscar goes to ...”と受賞を発表する様子が目に浮かび、これまでに観た作品が思い出される。近くにあるTCLチャイニーズ・シアター前は、人気映画スター200人以上の手形・足型が並ぶ名所だ。その中で唯一、歌手でありながら、そして唯一亡くなった後に展示されたのがマイケル・ジャクソンのものである。彼の存在がアメリカのポップ文化においていかに大きかったことかを物語っている。ちなみに、ディズニーの代名詞、ミッキー&ミニーやドナルドの手形・足型も並んでいるので、探してみると楽しいであろう。



リオデジャネイロ、マラカナスタジアム

麻布中学高校 岩佐洋一

昨夏、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジルの3か国を訪れた。どの国でもサッカー観戦を楽しみにしていたが、この写真は世界一有名なサッカースタジアム、マラカナで行われたフラメンゴVSバスコダガマ戦のスタンドの様子である。(ちなみに、来たるリオ・オリンピックの開会式、閉会式もここで開催される。)

この試合は、本拠を共にするリオのダービーマッチ。試合前日にスタジアムでチケットが購入できた時は、収容人員76,000余とはいえかなり高揚した。それまで、サンパウロでもブエノスアイレスでも、人気チームのチケットがうまく入手できなかったのだ。

南米のサッカー熱はつとに有名だが、ソシオと呼ばれるファンクラブがやたらに熱い。チケットもソシオを中心に回回り、高い手数料を上乗せされた高価な「観光客向け入場券」をエージェンツ経由で買う以外、人気チームの入場券はなかなか入手困難だ。

南米サッカーには別の困難もある。それはスタジアムの立地。ブエノスアイレスでは、2大人気チームのうち、「リ

バープレートは大丈夫だが、ボカスタジアムはかなり危ないところがあるので細心の注意をすべし。集団で行っても日本人はやられている。」と教えられた。ウルグアイでも、「郊外のスタジアムに行くときは、必ずタクシーを使うべし。」とホテルのフロントから忠告された。

さて肝心の試合のほうだが、プレイのレベルの高さには「さすがブラジル」となった。パススピードの速さ、トラップの正確さはそれだけで楽しめる。全員がとにかくうまい。それゆえ、ボールがタッチラインを割る回数が少なく、全く間延びしない。また、応援もこれまた熱い。日本では代表戦であってもゴール裏以外は、みな行儀よく椅子に座っているが、マラカナでは椅子に座らず立っての応援が基本。私の席は日本ではS席相当のところだったが、全員が立ちあがっての応援だったので、仕方なく立ちっ放しでの観戦となった。

この試合でのもう一つの特筆事項は、キックオフの時間。なんと午後10時。サンパと明るいビーチで有名なリオデジャネイロだが、その犯罪発生率の高さも世界有数。試合終了時刻が夜の12時というのは正直怖いものがあった。しかし、行き地下鉄は普通の人々が普通に乘っているし、チームユニフォームを身にまとったサポーターたちも大勢いて一安心。帰りも多くのサポーターたちと地下鉄に乗り、ホテルまで帰った。結構、達成感があった。